木田市長のど～んとコミュニケーション

真珠のように輝くまちづくりのために

vol.67

森と海・きずな事業

宮城県の畠山さんというホタテの養殖をしているかたは「森は海の恋人」と言っています。陸奥湾内でなぜ７万トンものホタテが採れるのか。それは「青森」という言葉がヒントだということです。青森という地名は陸奥湾を取り囲む青いブナの森からついたのだそうです。

森林の腐葉土が大量の植物プランクトンを育て、ホタテの栄養になるわけです。このように、森が海のために大切だということは、大抵の人が知っています。しかし、日本の森は大変なことになっています。安価な輸入木材、新建材、そして化石燃料に押され、国産材が利用されなくなり、森が放置されているからです。

放置された森は、人工林も天然林も、枝が積もり、光が差し込まなくなり、下草や小さな樹木が育たなくなります。そうすると土があらわになるため、土壌浸食が起こります。

昔のように、腐葉土が重なり、プランクトンの栄養を生み出す森ではなく岩肌がむき出しになった森となってしまいます。雨が降れば大量の水が流れるが、雨がやむと川へ流れる水の量が減ってしまうことになります。

日本の山で、木材が切られず、炭やまきが作られなくなった頃から、あわびなどの収穫量が減ったように思います。

鳥羽市が、新年度予算に計上している「森と海・きずな事業」の予算は、前述のことなどを考え、人工林や天然林に手を入れ、間伐をしっかりと行うものです。同時に雇用を増やし、林業の振興に寄与し、土壌の侵食を防ぎ、森で生活するサルやシカなどの動物を里近くから森へ呼び戻すこともできるかもしれません。川へ流れる水量が増え、海で磯焼けの防止、藻場の再生につながり、黒のり、カキ、アワビなどに好影響が出てくると考えられます。

長い年月にわたって悪化してきた環境を良くするためには、まだ長い年月を要するかもしれません。しかし今、何か手を打つ時期に来ているのではないかと思います。

先日行った地区懇談会では、漁業関係者から、地元が要求している「鳥羽河内ダムの建設」が海にもたらす影響を心配する声もありました。

洪水の発生をなくしてほしいという地元の人々の声と、ダムによる自然への悪影響を同時に解決するためには、「大雨の時だけ水をためる、いわゆる空（から）ダムがよいのではないか」と答えました。

これからもいろいろな知恵を出し合って森と海、そして森で生活する人々と海で生活する人々のきずなを深めていくことが大事であると考えています。

人権文化の花を咲かせよう

Vol.107

「人権文化の花」を咲かせたい

今回は、本誌『広報とば』のテーマとなっている「人権文化の花を咲かせよう」について、改めて考えてみました。

「人権」とか「文化」という言葉は、昔からあった言葉であり、みなさんもご存じのことと思います。

しかし、「人権文化」という言葉についてはあまり耳にしなかったのではないでしょうか。この言葉が登場したのは、１９９４年（平成６年）国連総会において『人権教育のための国連10年』が採択され、その中で「教育・研修・宣伝、情報提供を通じて、知識や技能を伝え、態度を育むことにより、人権文化を世界中に築く取り組みを」という行動計画を作成した時からです。

その後、世界中の国々や地域において、あらゆる人権問題の解消に向けた教育の推進と共に、「人権文化」という新しい文化の創造への取り組みが開始されました。

文化とは、世の中が開け進むことであり、真理を求め、常に進歩と向上を図る人間の精神的活動によって創造されるもので、21世紀のキーワードは「平和・人権・環境」であると言われています。

それでは、この「人権」もわたしたち人間が創り出す様々な文化の一つであると捉えるのであれば、「人権」に関わって、これまでのわたしたち日本社会で普段から当たり前と思って、疑問にも思わないぐらい日常生活の中に浸透している考え方や感じ方、行動の仕方を見直しつつ、将来の日本社会に向けて創り変えるという作業も必要ではないでしょうか。

そんなことを考えながら、より豊かな「人権文化の花」を市民のみなさんと共に咲かせていきたいと思います。